

世界盲人連合(WBU)について

日本ライトハウス

岩橋明子

1. 誕生までの経過

現在139ヶ国が加盟して世界的な視覚障害者関係団体となっているWorld Blind Union(WBU・世界盲人連合)が設立されたのは1984年10月であるが、その母体はWorld Council for the Welfare of the Blind(WCWB・世界盲人福祉協議会)とInternational Federation of the Blind(IFB・世界盲人連盟)である。前者WCWBは1949年オックスフォードに有志の関係者が集って設立準備会を開き、その後1954年パリで正式に設立総会が開催された。その後盲人の問題は盲人の手でという気運が高まり、組織されたのがIFBであって第1回総会は1969年スリランカで開かれている。

しかし、このような盲人関連の国際的な団体が2つ存在することで色々な不都合が生じてきたのも事実で、国連機関に対する代表権や限られた資源の配分等について競合が絶えなかったため、両者を統合しようという提案がヨーロッパ諸国から出されてきた。もちろんこれがすんなりと受け入れられたわけではなく、8年間にわたって両サイドでの検討や議論が繰返されたのである。賛否両論の渦巻く中で少数の代表を出し合ってワーキング・グループが作られたが、また、その委員長をどちら側から出すかでもめたり大変な数年間であった。ようやく何とか話がまとまり合同の役員会、実行委員会が開催されたのに、その勧告案がIFBの総会で否決されて役員会の顔が丸つぶれという無様な結果になったこともあった。両団体共に今後の主導権をどちらが持つかというのが一番の争点であった。

ヨーロッパではイギリスを除く殆どの国で盲人団体が中心となって事業を運営しており、同じメンバーがWCWBにもIFBにも加盟しているため全く重複していて不経済でもあり、無意味でもあって、合併について何の問題も生じない。一方、北アメリカでは盲人団体、サービス提供団体が夫々別個に確立して存在し、合併の必要を認めない。アジアや南アメリカ地域などの開発途上国におい

ては事業はすべて施設側が行ない、盲人団体が存在していてもまだ十分に育っていないところも多くて対等に話し合いが成立しない。アフリカに至っては、サービスは国際援助団体の手で提供され、盲人団体をこれから組織してゆく段階で、合併という概念は当てはまらない。これが70年代の状況であったわけで、とにかく、一転二転しながら1984年10月サウジアラビア・リヤドで開かれた合同世界会議においてWCWB・IFB共に解消して新しくWBUが誕生したのである。

2. 新しい出発

団体を設立するに当たって先ず定款の作成と承認、役員を選出と任命が必要となるが、定款については統合の話が具体化するに従って検討委員会が選出されて草案ができていたものの、役員については随分複雑な思惑やロビイングがあった。両団体共に統合とは言え、やはり自分達のサイドで主要な役職に候補を立てたいと考え、また、その中で出したい人、出たくない人、更には出たい人等調整と下準備には大変な苦労や気配りを要した。いつも総会の時には特に会長の選出にからんで大なり小なり動きがあったが、この統合の時ほど、皆が工作したことはかつてなかったと思われる。結果としては、両団体の副会長を兼任していたサウジアラビアのアブドラ・アルガニム氏が初代会長に選ばれて、WCWB側の意向や努力は実現しなかった。

とにかくアルガニム会長の下に副会長はソ連のボリス・ジミン氏、事務局長はスウェーデンのアンダース・アーナー氏、会計にベルギーのレオナルド・デ・ウルフ氏が選出され、これに両団体の前会長が加わって役員会が構成された。WCWBから副会長に長老ジミン氏を入れ、事務局長にベテランのアーナー氏をおいて、新しい会の運営は表向きはIFBの顔をたて実務はWCWBが担当するという形でのスタートであったと言えよう。事務局はパリのWCWBの事務局を用い、団体登録も1984年12月フランス政府に対して行なわれた。

第1回役員会は翌1985年4月アンマンで開かれWBUの行動計画等について討議し、次のような事項を確認した。組織としては、役員会の下に執行委員会をおき、更に常任委員会と地域ユニオンが設置されることになった。世界を7

地域(ヨーロッパ、アフリカ、中近東、アジア、東アジア太平洋、北アメリカ・カリビアン、ラテンアメリカ)に分けて夫々に地域会長が任命された。常任委員会は、社会開発、情報文化、開発途上国援助、盲婦人、盲ろう、リハビリテーション・訓練・雇用、研究調査、ルイ・ブライユ記念の8つの分野に設置され、WBUの行動計画に基いて活動することが決定した。新会長アルガニム氏は任期4年間の目標として開発途上国への協力援助と盲人団体の設立強化に重点をおくこと、また、国連をはじめILO、WHO、UNESCO等国际機関との緊密な関係維持にも努力することを打出した。更に会長の活動を補佐し、アドバイスするために特別委員会をおき、スタイン(RCSB・イギリス連邦盲人援護協会)、アフジャ(インド)、エリサルデ(ウルグァイ)、チサンピ(ザンビア)、ハガマム(援助委員長・スウェーデン)の各氏がメンバーとなった。

アルガニム会長はサウジアラビアを中心とした湾岸諸国の豊かな資金を途上国援助に引出すことができる立場にあり、任期中には相当広範囲に足を運んで各地の団体育成に協力したようである。余談になるが、各国政府に対して協力依頼の書簡を送った時にアメリカのWBU国家代表の了解も受けずに当時のレーガン大統領夫人に直接援助要請をしたのが分り、大物議をかもしたこともあった。抗議文を各国の代表全員に配布して会長を糾弾した裏には、WBU設立や会長人事についてくすぶっていたアメリカの不満の爆発があったのかも知れない。

設立以来の熱心な加盟呼びかけにもかかわらず、翌年4月の役員会当時の会員は40ヶ国であった。夫々120ヶ国余のメンバーを持っていた2団体が統合して半年以上経っても僅か40ヶ国という理由としては、各国内で代表を決定するのに手間取っていたということが挙げられる。つまり新しい定款によって、「国家代表の少くとも50%は公認された盲人団体の代表で占めること」が定められたために調整がうまく行かなかった国が多かった。公認された団体とは「その国で法的に登録され、盲人の代表とみなされていること、また、全国的組織で会員の大多数が盲人であり、会費を徴収し、会員から選出された役員が運営に当たっているもの、更に国家代表は夫々の団体の運営上責任ある地位にいる者」とされている。日本は6名の国家代表中日本盲人会連合(日盲連と略す)

から会長と副会長2名、あとの3名は日本盲人社会福祉施設協議会(日盲社協と略す)代表、眼科医、学識経験者という形で、日本盲人福祉委員会(日盲委と略す)を窓口にしていち早く加盟していたが、例えばインド等はWCWBにはインド盲人援護協会から6名指名していたのが、それを3名減らして盲人団体からということになったものの、そのためには盲人団体を結成しなければならず、乱立する中から3つの席を争うという状態になって中々うまく行かなかったようである。加盟国数が100を超えるのに2年かかっている。

3. 主な活動

各分野での活動はヨーロッパユニオンを中心に始まり、点字出版のコンピュータ化・触地図・盲人と芸術・スポーツ・弱視対策・歩行・知的障害・盲ろう・機器開発・盲婦人指導者養成等の会議やセミナーが次々と開かれた。中でもノルウェーとドイツ(旧西ドイツ)の活躍は著しく、開発途上地域への協力援助も多くなされている。WBUの大きな目的として組織強化と団体育成があったが、2年程の間に各地域ユニオンも確立し、各国で盲人団体の結成や指導者養成が始まった。特に盲婦人の立場がきわめて低く、問題の多かった地域で訓練やセミナーが開かれ、盲婦人自身の自覚と自立を呼びかけるなどの積極的な活動が見られるようになった。

WCWBから引継いだ事業としてあらためて打出されたのがルイ・ブライユの生家の修理と維持がある。全世界の盲人の恩人と慕われるブライユが生まれ育った家はパリ郊外のクープレーにあるが、老朽化がひどくてフランス国内だけの努力では中々保存が困難であると世界各国に協力依頼が続けられてきた。できるだけ当時のままの状態を保ちながら記念館として資料等を揃えていくためには年間約280万円必要でフランス側ではその10%位を負担、残りに対して援助を求めている。保存のための基金の設置も計画されて1987年にはカナダ盲人援護協会・アメリカ盲人援護協会・アメリカ盲人連盟の3団体が合わせて3万ドル(約390万円)寄付したのをはじめ1988年には日本から228万円を寄贈した。こうした多額の寄付は定期的なものではないので、ルイ・ブライユ記念委員会では継続的な支援も求めている。

開発途上国援助委員会は「力を合わせて発展を」というスローガンの下に委員長名で各国政府宛のアピール文書を用意し、1985年5月23日を期してWBU代表を通じて政府に提出した。会長はじめ役員はILO、WHO、UNESCO、FAO（国連食糧農業機関）等国連機関にも届け、委員長自身はローマ法王に拝謁して直接手渡すことができた。多くの国々で贈呈式やマスコミ発表があり、その反応についての報告など世界的な運動であった。これについては残念ながら日本では何の行動もなかったと記憶している。資料や文書の翻訳や処理に時間がかかるのが、こうした国際的な共通行動に参加しない原因の1つであろうか。また、今1つは国内だけで行動目標があり、外部からの共同プレッシャーの必要を感じていない盲人団体の特殊性もあると思われた。この「力を合せて発展を」は1988年の第2回総会のテーマとなり、東アジア太平洋地域ユニオンの総会のテーマともなった。

第1回WBU東アジア太平洋総会は1987年11月9日～14日に香港で開催された。WBU結成以来初の地域総会で日本からも大勢参加している。香港盲人輔導会がホストとなったが、会議後、香港から広州に移動して中国側でも催しがあるなど、未だかつてなかったことである。18ヶ国170名が集まり、教育・雇用・国際協力・リハビリテーション・先端技術の導入や機器・弱視等について今日の問題から将来への見通しまでペーパー発表や討議が持たれた。

設立後4年間、徐々にではあるが、WBUは基盤を固めながら歩みを続けて第1期を終え、第2回総会を迎えることになり、スペインが開催国となった。この間にはWOWB以来永年事務局長として4代の会長を支え、名補佐役として世界中の関係者から敬愛されていたアンダース・アーナー氏の急逝という悲しい出来事もあった。明晰な事務能力、優れた国際感覚と穏やかな人柄は、まだ発達途上にあるWBUにとって欠くべからざる存在であっただけにその突然の訃報は深い悲しみを各地にもたらした。まだ60歳、会長と共にラテンアメリカ地域ユニオンの設立総会に出席して帰国後数日のことで、まさに最後までWBUのために働き尽されたと言えよう。幸い後任者として選ばれたのがスペインのペドロ・ズリタ氏で、母国語以外に英・独・仏・伊・ロシア・ポルトガルの各語に堪能で片言ではあるが日本語までという有能さ、国際団体の事務局長

としてはこの上ない適格者である。

4. 第2回世界総会

第2回総会は1988年9月18～24日にマドリードで開催された。ONCE(スペイン盲人協会)が設立50周年を迎えるため、その記念行事として総会の招聘が決められたものである。WBU加盟国も114ヶ国に達し、160ヶ国600名の代表やオブザーバーが参加、スペイン国王の妹君マーガレット王女をはじめ社会大臣、マドリード市長らの来賓も出席して、オーケストラと全盲ピアニスト、ホセ・オルテガのモーツァルト作曲ピアノコンチェルトイ長調ケッフェル414の演奏で始まるという盛大な開会式であった。IAPB(国際失明防止機関)名誉会長ジョン・ウィルソン卿の格調高く、かつ現実的な基調講演も感銘深いものであった。ONCEは広い敷地に新しく学生寮、講堂、体育館、資料室等もある広々した校舎などを新築したばかりで、文字通り木の香も新しい学生寮は会議参加者の宿舎として無料で提供された。大食堂、小食堂、24時間営業の喫茶室など設備も充実していたが、中でも面白いと思われたのは居室の配置であった。8～10人位の個室が1枚のドアの奥にあり、リビングと台所は共通でTV、洗濯機、冷蔵庫も完備され、個室にはベッド、机、バス、トイレ、クロゼット付で家庭的な雰囲気と自立への配慮が見受けられた。

日本からは日盲連企画のツアー参加者が多く、40名位が開会式やレセプションに出席するなど、地元スペインに次ぐ大量参加であった。英・仏・スペイン・アラブ語の同時通訳がついたが日本語までは望むべくもなく、会場の一角を日本人専用として40席確保し、そこだけで聞こえるように日本語の通訳をつけるなど特別に配慮がなされていた。ところが2日目以降は座るのは数名程で他は空席となり、しかも他国の人達は席が足りなくて困っているといった有様で、何とも具合の悪い思いをしたのも事実であった。これはオブザーバーという立場の解釈の違いから生じたことで、国際会議のオブザーバーはあくまでも会議に出席する人達であるが、投票権をもつ正式代表の数は定められているのでその立場を区別するためのカテゴリーである。議長の許可があれば発言や質問はできるが採決には参加できない。ただの「見物人」ではないのである。

会議は事務会と世界会議に分れ、通常通り事務会では会長や事務局長の報告、物故者への黙祷などの後運営上必要な委任状委員会、指名委員会、決議委員会
が指名承認された。国連障害者の10年も半ばを過ぎ、国連関係のメッセージ
もその活動成果や今後の計画等の報告がなされた。ところが、ここで参加者が
発言を求めて「ILOやWHOは我々のために直接有益な活動をしているとは思
えない」とか「その報告は自己宣伝で一体どこでそんな事業があったのか」
等次々と言い出し、逐には報告を読み上げた代表が「このような攻撃を受ける
ために来たのではない」と言って退席する始末で、ようやくそのセッションが
終了した。

続いての委員会報告では最初の定款と細則の審議委員会のところで全く混乱
に陥ってしまった。改正案は一定数の国家代表が支持して総会の3ヶ月前に
事務局長の手許に書面で提出しなければならないにも拘らず、人数が足りな
かったり提出方法が規則に反していたりで延々と論議が続いた。また、定款で
会長は一任期のみとされているので、改正して再任を認めるようにしようとする
動きがある等ドロドロしたものも感じられる中で、敏腕のジャニガン氏(US
A)を議長においてさえ収拾がつかず、各常任委員会の報告は時間が無くな
ってすべてカットされてしまった。遠い国々からはるばるとスペインまで来て
一体何だったのかと情けなくなるようなお粗末なことであった。参加者の中に議
事進行のルールや国際会議の在り方を充分理解していない人達が多かったのが
トラブルのきっかけとなったのだが、投票するにも再三の説明にもかかわらず
無効票や違反票があるなど運営に当たった人達は大変な苦勞だったと推察される。
こんな中でもどうにか役員も決まりWBUは第2期に入った。

会長はイギリスのダンカン・ワトソン、副会長はウルグァイのエンリケ・エ
リサルデ、会計はカナダのユークリッド・ヘリー、事務局長はスペインのペド
ロ・ズリタ(再選)という顔ぶれで役員会は構成され、東アジア太平洋地域ユ
ニオンの会長にはデビッド・ブライス氏が再任となった。また、混乱をきわめ
た定款改正については委員会をおいて更に検討、次の総会にかけられる。委員
長はデンマークのスベンド・ジェンセン、東アジア太平洋地域からはオース
トラリアのジョリー氏がメンバーとして加わっている。マドリッド総会では会計

報告も不鮮明で物議をかもしましたが、新しい会計のヘリー氏は銀行口座も帳簿もすっかり整理し、透明財政に立て直す重責を負った。

5. WBU関連の活動

第2回総会後の4年間のWBU直接の活動としては毎年の役員会、2年に一度の執行委員会、地域毎の総会や役員会、機関紙「World Blind」の発行等があるがWBU協賛のような形で専門的な会議が数多く開催されている。特にICEVH(国際視覚障害者教育協議会)、IFLA(国際図書館協会連盟)、IMC(国際歩行会議)、IAPB等々独自の組織を持ちながらWBUとも連絡を保って着実な歩みを続けている。近いところでは本年7月にはICEVH総会がバンコクで開かれ、2年先1994年のIMCはメルボルンで既に開催準備が始められている。この他、ヨーロッパ地域ユニオンの主催する専門会議は点字符号(楽符、科学数学符号の統一等)、触地図、芸術、機器開始その他多彩な分野で開かれて地域外ではあるが、日本からも専門家が参加している。望むらくはこのような会議やセミナーに出席した人達が帰国後できるだけ直ぐに報告なり発表なりして、広く関係者に情報提供し、それに対応する行動や施策がとられるようになればと思う。資料などが送られてきても、受取ったところで留ってしまうことなく広められると良いのだが、どうしても日本語に訳したりする手間がかかるために中々実現しないし、時には宝の持ちぐされにもなりかねない。これは窓口になっている者達の責任であることを痛感している。

この期間に特に活発化したのは、始めにも触れた盲婦人の地位向上運動と盲ろうの人達の活動であろう。盲婦人委員会の委員長パキスタンのサルマ・マクブール女史は非常に発言力のある指導者で、開発途上地域を中心に積極的な活動を続けた。例えば1990年1月にフィリピンで開かれた委員会と指導者育成セミナーの内容を見ると、フィリピン各地から指導性と能力の優れた盲婦人25名を選び、「自己認識、自己変換、自己権力取得、女性の本質、地域指導者としての婦人の責任、目標設定、計画」等についてリーダーを中心に討論や学習が行なわれている。

1989年10月ストックホルムで開かれた第4回ヘレン・ケラー世界会議には25ヶ国から60名以上の盲ろう者代表と100名を越す関係者が集って、盲ろう者自身が自分達の経験、努力、要望等を発表し、今やヘレン・ケラー女史は特殊なケースではなく、今後は益々多くの盲ろう者が自らスポークスマンとして社会参加してゆくであろうことを実証した。この結果は1991年秋東京で開かれたWBU東アジア太平洋地域総会に多数の盲ろう者の参加があったことにも現れたが、これは未だかつてなかったことであった。盲ろうの人達へのサービスはまだ国によって大きな隔差があり、ストックホルムで発表された報告によれば、このようなケースは余り存在しないという国さえもあったという。イギリスで行なわれた調査によれば盲ろう者団体の会員数は800余りであるが、この他に11,000名以上が多少なりとも視覚聴覚障害を併せ持っていることが分っており、更に視力と聴力を冒す確率の高いアッシュー症候群の患者を持つ家族は450世帯もあるとされている。要するにこうした重複障害者が見付けられていない国がまだ多く、それが対策や研究を遅らせる大きな要素となっているのではないかと思われるが、先端技術の発達がコミュニケーションを容易にする方向により早く進むことが望まれ期待されている。

6. 今後の方向

今年11月にはWBU第3回総会がエジプトのカイロで開催されることになっているが、アフリカで開かれるのは初めてである。できるだけ開発途上国でも会議を開くように以前から努力されてきたが、今回まで実現しなかった。実は1979年にWCWBはナイジェリアで、IFBはセネガルで総会を開くべく準備していたが、最終段階でナイジェリアの受入れ体制が整わず、急遽両団体共にベルギーのアントワープに変更したということもあった。今回は1990年にマリで役員会があったし、アフリカ地域ユニオンも設立されているので間違いなく史上初めて世界中からカイロに集ることになるであろう。

WBUは視覚障害者の国際団体としての性格を備えて育ってきた。それ自体は直接の事業は持たないで組織強化に重点をおき、国連や他のNGO'S(民間公益団体)と関係を保ちつつ視覚障害者に関わる問題については発言権をもつ

といういわゆるユーザー・グループとしての立場を固めつつあるように見える。一方で専門分野別の団体や国際援助団体は夫々の活動を続けながらWBUとも関連を持っているのだが、これは以前のWCWBが専門分野の活動の中で常に指導的役割を果たしてきたのと比べて大きな違いがある。WBUの要望に添うよう留意しながら、経験や知識・資源を持っている団体が活動するという傾向は、現在の社会の趨勢がそのまま反映しているものと思われる。

ただ、少し懸念されるのは、各種団体とWBUの間に本当の意味で友好的な協力体制が保ってゆけるかどうかという点である。確かに表向きは「常に共同で」ということになってはいるが、どこか以前とは違うような気がする。例えば、東アジア太平洋地域ユニオンが1989年にニュージーランドで地域役員会を開くに当り、WBU会長も出席したにもかかわらず、国際団体や国連関係からは誰一人出席しなかった。それも案内状に対して何の反応も無かったということで、地域会長は大いに遺憾であるという表明をした。東京の総会の時は幸いWHO、ILO共に代表できる方々が日本におられたので代表として出席が得られて、会長も面目を保つことができ大いに評価していた。

国際援助の在り方についてのWBUの強い主張は「その援助あるいは事業が真にその地域の視覚障害者にとって有意義なものかどうかの判断やその成果の評価はWBUがするべきであり、着手前に地域ユニオンの承認を得なければならない」というものである。確かに外部から来て、勝手な考え方で色々やられては折角の資源も努力も十分に活かされないという意見はもっともである。しかし、別の立場からすれば、自分達の資力、人材、ノウハウをもって開発途上地域への援助をしようとする時に、一々その地域ユニオンの許可がなければ、というのでは余り良い気持もしないだろう。しかもマドリード総会の時のように国際機関の報告に対して一言の謝辞もなく、ひたすら批判や要望ばかりであるようでは、直接的な関わりは避けたいと思われても仕方がない。

イギリスのRNIB(イギリス盲人援護協会)、スペインのONCE、ヨーロッパユニオンがWBSに相当額の財政援助をしているが、それは会長や事務局長の活動を支えるだけで精一杯、とても直接事業を行なう程の資力は蓄積できないし、WBUはあくまでも世界中の盲人団体を統括する組織として今後も進んでゆくことであろう。

といういわゆるユーザー・グループとしての立場を固めつつあるように見える。一方で専門分野別の団体や国際援助団体は夫々の活動を続けながらWBUとも関連を持っているのだが、これは以前のWCWBが専門分野の活動の中で常に指導的役割を果たしてきたのと比べて大きな違いがある。WBUの要望に添うよう留意しながら、経験や知識・資源を持っている団体が活動するという傾向は、現在の社会の趨勢がそのまま反映しているものと思われる。

ただ、少し懸念されるのは、各種団体とWBUの間に本当の意味で友好的な協力体制が保ってゆけるかどうかという点である。確かに表向きは「常に共同で」ということになってはいるが、どこか以前とは違うような気がする。例えば、東アジア太平洋地域ユニオンが1989年にニュージーランドで地域役員会を開くに当り、WBU会長も出席したにもかかわらず、国際団体や国連関係からは誰一人出席しなかった。それも案内状に対して何の反応も無かったということで、地域会長は大いに遺憾であるという表明をした。東京の総会の時は幸いWHO、ILO共に代表できる方々が日本におられたので代表として出席が得られて、会長も面目を保つことができ大いに評価していた。

国際援助の在り方についてのWBUの強い主張は「その援助あるいは事業が真にその地域の視覚障害者にとって有意義なものかどうかの判断やその成果の評価はWBUがするべきであり、着手前に地域ユニオンの承認を得なければならぬ」というものである。確かに外部から来て、勝手な考え方で色々やられては折角の資源も努力も十分に活かされないという意見はもっともである。しかし、別の立場からすれば、自分達の資力、人材、ノウハウをもって開発途上地域への援助をしようとする時に、一々その地域ユニオンの許可がなければ、というのでは余り良い気持もしないだろう。しかもマドリード総会の時のように国際機関の報告に対して一言の謝辞もなく、ひたすら批判や要望ばかりでるようでは、直接的な関わりは避けたいと思われても仕方がない。

イギリスのRNIB(イギリス盲人援護協会)、スペインのONCE、ヨーロッパユニオンがWBSに相当額の財政援助をしているが、それは会長や事務局長の活動を支えるだけで精一杯、とても直接事業を行なう程の資力は蓄積できないし、WBUはあくまでも世界中の盲人団体を統括する組織として今後も進んでゆくことであろう。

援助団体や専門団体は、夫々関心ある人々を集めて研究や活動を続けてゆき、その中で共存しているのはヨーロッパ地域ユニオンと特定の国々のみ、あとの地域ユニオンは要望を出したり氣勢を上げたりしているだけということになるのではなかろうか。かつてWCWBは盲人団体と専門家やサービス提供者を1つにまとめた組織として結成された。点字の問題、失明防止、教育、リハビリテーション、職業、情報、機器開発など広い分野で常任委員会が率先して問題提起をし、専門家の協力を得ながらそれらの国際団体を設立したり強化したりしてきた業績は大きい。IFBが生まれ、やがて統合という形で一つになったが、その結果は極言すればWCWBは消され、IFBが残ったと言えるかも知れない。そして、専門団体は独立して動き始めてしまった。何のための統合であったのか、やはり性格の違う団体が調整をとりながら別々に存在するのが自然な姿なのではないのだろうか。こうした中で、何か宙に浮いたような日本の立場はどうなるのか、日本というよりは、サービス提供者である施設として我々が今後どういう関わり方をしてゆけばよいのだろうか、40年近くの移り変りを内から、また、外から、眺めてきた1人として複雑な感慨を抱いている。

よりよきものをもとめて

1977年、AFB（アメリカ盲人援護協会）が白杖メーカーから10種類の杖を集め、総合テストを行った結果、ポケットブルケーンが最も秀れていると評価されました。日本でも好評発売中です。



M-120 ポケットブルケーン
4,800円（送料別）

杖の**シオム**では、直杖6種類・折りたたみ杖4種類を発売しており、石突スベア及び折りたたみ杖については修理をうけたまわっております。

●御注文、御問い合わせは下記に願います。

株式会社 **シオム**社 5553 大阪市福島区大開1-7-23 ☎06(463)2104 振替大阪2645